

Museum News

Planning Office



絵：柳田 基

2011 春

展覧会／講演会

展覧会

関西学院所蔵の絵画Ⅱ

Art of the Bible

- 視る聖書の物語 -

2011.4.1 (金) ▶ 6.10 (金)

10:00 ~ 16:30 日曜日休館 (入場無料)

西宮上ヶ原キャンパス 時計台2階展示室

講演会

「聖書の中から人間の弱さを描く
- 絵画制作にあたって -」

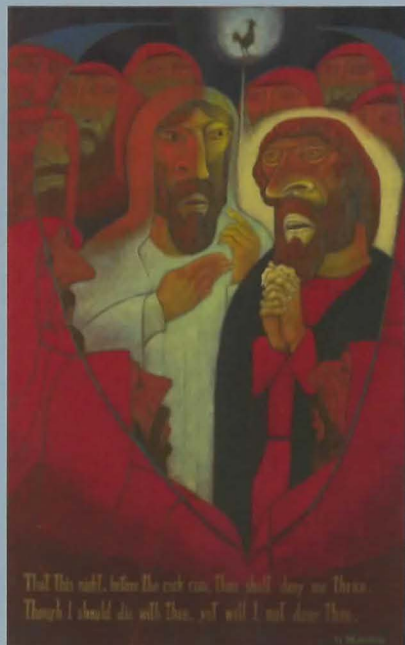
講 師：堀江 優 氏 (画家)

2011.5.18 (水) 13:30 ▶ 15:00

於：西宮上ヶ原キャンパス

大学図書館ホール (入場無料)

堀江優氏は、小学校の教師をしながら聖書の物語をテーマに絵画制作を続け、1979年に「画壇の芥川賞」とも称される安井賞を受賞。イエスの周りにいる人物に焦点をあて、水彩絵の具を何度も塗り重ねる独自の画風で、人間の弱さを表現してきました。

That this world, before the rock can, then shall say us Christ
Thought I should die with thee, yet will I not show thee

堀江優 〈ペテロの離反を予告する〉2011年

関西学院の所蔵するキリスト教絵画を公開する

Art of the Bible 展を開催

日本の画家による キリスト教を主題とした絵画展

2011年春には、関西学院が所蔵する美術品のなかからキリスト教に関する絵画を特集した「Art of the Bible - 視る聖書の物語 -」展を開催します。キリスト教主義教育を根幹とする本学にとって、とてもふさわしい展覧会です。

本学が所蔵するキリスト教を主題にした絵画は、日本人がキリスト教を、自らのものとして受容し、表現していることがよくあらわれている作品がそろっています。

神戸に育ち生活する中で自然にキリスト教とふれあうようになった小磯良平、いち早く日本人らしさをもって信仰を表現した田中忠雄、和紙に型染版画という日本の民芸的手法によりイエスを表現した渡辺禎雄、人間の存在・宗教の意味を問い続けた鴨居玲、聖書の中の人物を自分自身に照らし合わせ、人間の弱さを表現しつづけている堀江優。1点1点の作品の構成や筆のタッチに、画家自身の心や聖書の中の人物の感情があふれ出ています。

これらの絵画は、中学部、高等部、大学の構内に常時展示されているものもありますが、なかには会議室に掛けられていて普段、目にすることができない作品も含まれています。

衝撃的な鴨居玲の 〈切り裂かれた教会〉

今回出品される鴨居玲の〈切り裂かれた教会〉は、2007年に本学に寄贈され、高等部に保管されていますが、これまでほとんど紹介されることがなかった作品です。鴨居玲が最初にキリスト教に出会ったのは、1940年、関西学院中学部に入学した12歳の時でした。その後、渡欧するなかで、キリスト教は作家活動に大きな影響を与えるようになります。鴨居は盛んに教会シリーズを描きました。その一作が〈切り裂かれた教会〉です。鴨居が自

らナイフで切り裂いたキャンパスを目の前にすると、自分の存在への問いかけ、そして神への問いかけが生々しい叫びとして聞こえてきます。制作活動に妥協を許さない画家のきびしい態度に大きな衝撃を受けます。

安井賞受賞画家の 堀江優氏から寄贈を受ける

今回の展覧会の企画段階から注目していた画家がいます。神戸に生まれ育ち、小学校の教師を勤めながら、聖書に題材を求めた絵画を制作してきた堀江優氏です。

堀江氏が描く聖書のなかの人物たちは、独特にデフォルメされながら、人間の内面をさらけ出します。水彩絵の具とは思えないような重厚なマティエール感と独自の画風によって力強いメッセージを放つ堀江氏の作品は、1979年に安井賞を受賞しました。安井賞は、洋画家・安井曾太郎(1888-1955)の画業を顕彰するとともに、新人の登竜門として多くの優秀な洋画家を輩出してきました。堀江氏は受賞後、ますます充実した制作活動を行うようになります。

展覧会の企画段階では、本学に堀江氏の作品は所蔵されていませんでしたが、本展のアドバイザーである高等部の東浦哲也教諭のご努力により、堀江氏の作品2点が寄贈され、本展に出品できるようになりました。1975年の作品〈あの方は、ここにおられない。〉と1976年の〈お前は、神の子、メシアなのか。〉です。

この2点の寄贈を受けただけでも感謝すべきですが、この3月7日にご本人からご連絡をいただき、「新作が仕上がったので、関学に寄贈したい」との申し出がありました。図録がすでに制作中でしたので、新作〈ペテロの離反を予告する〉は特別出品として、展覧会に展示させていただくことになりました。

感謝申し上げます。次第です。

(博物館開設準備室長 河上繁樹)

展覧会報告

関西学院所蔵の絵画 I

誰もやらないことをやれ！

—現代に受け継がれる吉原治良の精神—

関西学院が所蔵する絵画の展覧会第一弾を開催しました。吉原治良をはじめ、関学出身者が多数所属した《具体美術協会》に焦点を当て、個性豊かな作品を観覧いただきました。

2010.10.5 (火) ▶ 12.18 (土)
10:00 ~ 16:30 (日曜祝日休館)
※但し 10.10 (日) , 10.11 (月・祝) , 11.3 (水・祝) は開館しました。
関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス
時計台 2 階展示室
入場者数 1718 人
記念講演会参加者 105 人



961-1962

関西学院所蔵の絵画

学院に縁の画家

吉原治良の作品を展示

博物館開設準備室では関西学院所蔵の絵画展をシリーズで企画しました。関西学院には中学部、高等部、大学、関西学院会館など普段皆さんが利用している施設の各所に絵が飾られています。その数は多くありませんが、学舎や図書館、チャペルの壁に掛けられた絵に目を留めたことのある人は少なくないでしょう。しかし、所蔵品のなかには学生が普段立ち寄りたことのない会議室に飾られている作品もあれば、倉庫に保管されているものもあります。そこで、関西学院が所蔵する絵画を一般に公開する機会として展覧会を企画し、開催しました。



その第一弾が「関西学院所蔵の絵画 I 誰もやらないことをやれ！—現代に受け継がれる吉原治良の精神—」です。吉原は国内外から高い評価を得てきた前衛芸術集団《具体美術協会》を結成し、リーダーを務めた画家として知られています。また彼は関西学院高等商学部の卒業生でもあり、在学中には絵画部「弦月会」に所属していました。卒業生制作の作品は関学の絵画コレクションの柱のひとつですが、《具体美術協会》に所属する画家の中には村上三郎や吉原通雄ら関学出身者もいます。彼らを中心とする《具

体》の画家達をはじめ、メンバーの松谷武判がパリ留学で修行した版画工房「アトリエ 17」の作品を展示しました。

吉原治良が語った言葉

誰もやらないことをやれ！



松谷武判 (wave-90-1-1) 1991 年

今回出品した吉原治良の〈作品 1961-1962〉はキャンバスに荒々しく付着させた絵具の凹凸が際立つ作品です。吉原は《具体美術協会》を作るにあたり、精神の自由と物質について語っています。機関誌『具体』創刊号 (1955 年) には、「われわれの精神が自由であるという証を具体的に提示したい」と書いており、その精神を生かす方法は物質を生かすことであり、物質を物質のままその特質を生かすことの重要性を『具体美術宣言』(1956 年) で述べています。また、吉原は生前「俺の見たことの無い作品を見せろ」「誰もやらないことをやれ」と《具体》の若手メンバーによく言っていました。キャンバスに絵具をうちつけた村上三郎の絵、独特で滑らかな形をビニル系接着剤で生み出した松谷武判、布を使った作品からパフォーマンス、版画

まで多岐にわたる作品を作り続ける堀尾貞治など個性溢れる作家達の作品からは各々の方法で受け継いだ吉原の精神が滲み出し、観覧者の方々にも御好評いただきました。

記念講演会

“スカ”から生まれるモノ

会期中の 10 月 11 日 (月) には、《具体》のメンバーとして活動し現在も精力的に作品の制作やパフォーマンスなどを行われている堀尾貞治氏と、大阪電気通信大学教授でアートプロデューサーの原久子先生に、対談形式でご講演いただきました。講演会は第 61 回美学会全国大会との共催で行い、約 100 名の方にお越しいただきました。DVD 上映を交えながらいただいた《具体》時代に関するお話や《具体》メンバーとのお話、また現在の制作やパフォーマンスなどについてのお話は、躍動感にあふれ、まるでパフォーマンスの場に居るかのようでした。堀尾氏の活動理念に息づく具体の先輩達の言葉や、日々の芸術活動を通して思われたことなど、滅多に聞くことのできないお話を伺える貴重な機会となりました。抽象的な作品やパフォーマンスの中に込められた意味がよくわかり、関学の所蔵する作品への理解も高められた講演会となりました。



観覧者の声

アンケートより

具体というものがどういふものか分かりながら見れた。ずっと行こうか迷っていたのですが、思いきって行くとすごく印象的でした。これからの展覧会も楽しみにしています。

(関学生 女性 20歳代)

もうすこしボリュームがあった方がいいと思いました。関学がアートに力を入れるのは、たいへんこのまじいと思います。これからもつづけていってほしいです。

(関学生 男性 30歳代)

若干とりつき難い具体、でもゆっくり見ているとおもしろい感じがした。

(関学OB 男性 60歳以上)

観覧用の図録があり、作品理解が助けられた。

(一般 男性 40歳代)

ビデオの解説がよかった。

(版画家 女性 40歳代)

もう少し点数が欲しい。具体展カタログがもっと見たい。作品だけでなくこういう小さな展覧会こそ具体の活動そのものが伝わるように工夫されたい。その時代が目にかぶような展示してほしい。

(学院関係者 男性 40歳代)

いったいどのような inspiration がはたらいて、これらの絵を描こうと思うのか不思議だった。この館を定期的に開けていただけるとうれしい。

(関学生 男性 20歳代)

こんなにも学校の中にアートがあったとは！！

(関学OB 男性 50歳代)

学院OBで具体美術の有力メンバーであった嶋本昭三氏の作品がないのが不満、残念。嶋本昭三の作品も学院にて入手すべきと思う。

(関学OB 男性 60歳以上)

5分ぐらい波動を見つめ続けた。すごい。

(関学生 男性 20歳代)

これからも、このような企画に興味があり、あれば是非訪問したい。
(非常勤講師 男性 60歳以上)

生の迫力に、作品が訴えてくるものを感じさせられた。

(関学生 男性 20歳代)

斬新な筆づかいが何とも言えなかった。

(関学生 男性 20歳代)

布、砂、木等の表現が型にはまらず表現出来るのに興味を持った。
(主婦 女性 60歳以上)

Event ぼんくらの写真が印象に残りました。何かぶっとんだ作品ばかりでおもしろかったです！！

(関学生 女性 20歳代)

大学に博物館があり、びっくりしました。これからも来てみたいですよ。

(一般 男性 40歳代)

関学博物館の創立を期待します上ヶ原に新しい芸術文化の花を。

(一般 男性 60歳代)

作品が少なかった。生涯がたどれるような説明があるといいのと思った。

(学院関係者 女性 50歳代)

“具体”の回顧展などはまた異なった作品を目に出来て良かった。早く博物館が正規のものとして完成するとよろしいですね。

(一般 男性 40歳代)

時計台2階がこのような展覧の場に生まれ、広く一般に公開される事、大いに結構。

(学院関係者 男性 60歳代)

当大学の中に博物館があるのにおどろきました。完成が楽しみです。是非オープンな博物館を！！

(一般 女性 30歳代)

アンケート統計

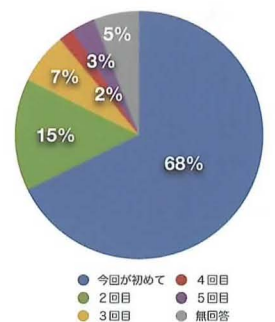
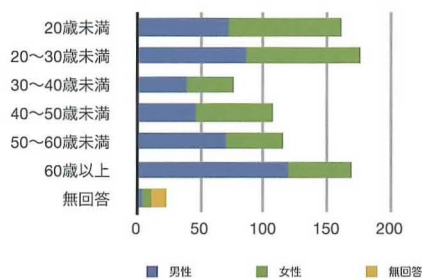
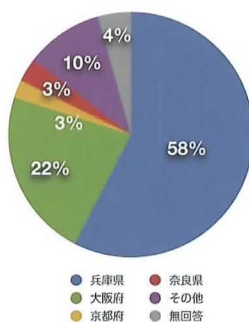
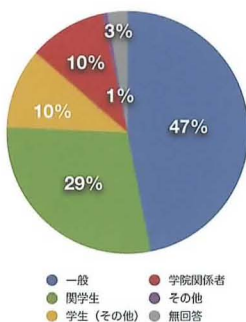
アンケート回答者数 827人
アンケート回収率 48.1%

一般	388
関学生	238
学生（その他）	88
学院関係者 (卒業生含む)	85
その他	6
無回答	22

兵庫県	476
大阪府	185
京都府	19
奈良県	26
その他	85
無回答	36

	男性	女性	無回答
20歳未満	72	89	
20～30歳未満	86	90	
30～40歳未満	39	37	
40～50歳未満	46	61	
50～60歳未満	70	45	
60歳以上	119	50	
無回答	4	7	12

今回が初めて	560
2回目	121
3回目	55
4回目	16
5回目	26
無回答	49





公開研究会

—実物とデジタル画像による文化財考察—

本室では2009年度から、京阪神の美術館で開催されている展覧会に合わせ、展示作品に関連する高精細デジタル画像を活用した研究会を開催しています。この研究会では実際の作品の観察と共に、肉眼では見る事の困難な作品細部の提示、あるいは類似作品の比較検討を画像によって行おうとするものです。第3回は黒川古文化研究所での「武士の華・刀装具」展に合わせて開催しましたが、2010年度は学内での開催(第4回)という、新たな試みも行いました。

第3回公開研究会

共催・会場：黒川古文化研究所
 講師：黒川古文化研究所研究員 川見 典久氏
 題名：金属工芸の小宇宙
 —高精細画像でみる刀装具—
 開催日時：2010年11月13日(土)13:30～

本題に先立ち司会から、この研究会では知識の側からではなく、「もの」をみるという態度で臨み、講師と参加者として生きた場を作りたい、という趣旨が提案されました。講師からは最初に、三所もの(小柄・筭・目抜)に施された赤銅等の色付け技法、また文様部の剥離面から、金板で包む「うっとり」と「象嵌」の違いが分かる画像が提示されました。それをさらに詳細に観察していくと、足し増しと思えるものがあるという、形態の有り様から作り手の意識の違いについて話が及びました。それは同時に、制作時代の問題を孕むという指摘です。次に二つの目貫を取り上げ、獅子のあばら骨を表した線が、意味が分かって刻まれているのか、伝承されたデザインとして扱われているのか、という相違が明らかにされました。一方、会場からは拡大画像をみながら、「うっとり」や「象嵌」ではなく、「メッキ」ではないかという指摘、後藤家の作かどうかという疑問が提出され、さらには分業制作へと話題が展開していきました。最後に粟穂を得意とする荒木東明の作といわれる、いくつかの作品の粒の表現を取り上げ、道具、意識、立体性、真贋についての意見が交わされました。

参加者：48名

第4回公開研究会

主催・会場：関西学院大学博物館開設準備室
 (西宮上ヶ原キャンパス時計台2階展示室)
 講師：博物館開設準備室長 河上 繁樹
 文学研究科大学院研究員 高木 香奈子
 題名：小袖の美を探る—江戸時代の織りと染め—
 開催日時：2011年3月12日(土)13:30～

本室では関西学院所蔵・寄託の染織品についてこれまで調査を進めてきました。その一部は2009年度開催の展覧会「復元 江戸時代のきもの いまとむかしの職人技」にて公開しましたが、その後新たに染織品の寄託を受け、高精細画像の撮影を行うとともに更なる研究に取り組んできました。今回の研究会はその調査過程で知り得たことや普段の鑑賞では見落としがちな染織品の細部について話し合う場となりました。

研究会の内容は、まず織りに関することとして、綷子のように見える綾織物を取り上げ、江戸時代の文献や中国の資料、染織品の画像を使いながら問題提起を行いました。また染めに関しては、江戸時代の染色技法を代表する鹿子(鹿子絞り、型鹿子、打出し鹿子)について拡大写真を使いながら、普段あまり目にする事のない染織品の細部や裏側をご覧いただきました。

当日は時計台2階展示室にて染織品の展示を行い、実物と画像を見ながらの研究会となりました。

参加者：33名



伝後藤宗乗 恵比寿大黒二所物



伝後藤宗乗 恵比寿大黒二所物(部分)



松藤小花模様小袖裂(部分)



松藤小花模様小袖裂(組織拡大写真)

